

# 「世界遺産認識が欠落」

十津川・玉置神社  
神代杉着生木伐採

## 国会議員連が指摘

### 伐採不適切、再発防止提言

世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に含まれる十津川村玉置川の玉置神社境内で、ご神木の神代杉(県天然記念物)の着生木が伐採された問題を調査してきた世界遺産国会議員連盟特別顧問の玉置公良・元衆院議員は、世界遺産認識の欠落などを指摘する報告をまとめ、3日、県に対して再発防止を提言した。

同議員連が7月に出した質問状の回答で、県教育委員会文化財保存課は、着生木の伐採について、神代杉などの巨樹群がバッファゾーン(緩衝地帯)であることなどを理由に、「世界遺産の顕著な普遍的価値に影響を与えない」とした。

同議員連は構成資産とバッファゾンの関係性から、神代杉が「文化的景観を形成する具体的な構成要素」と位置付け、「世界遺産認識の欠落」を指摘した。

また、着生植物自体の価値を認め、「伐採行為は不適切だった」と判断。独立行政法人

森林総合研究所の所見なども踏まえて「総合的な保全の方法を検討すべきだった」とした。

再発を防ぐための提言は、県や村を含めた関係者の協議・連携の必要性を強調。玉置神社には「伐採に反対した神職が辞職に追い込まれるなど民主的な運営ではなかった」と問題点を指摘した。

9月には玉置神社でも氏子総代会の改選が行われ、改善を望む役員体制が発足。村議会内にも世界遺産認識を高める動きがあり、玉置さんは「今後は正常な神社運営を期待している。県も関係機関と

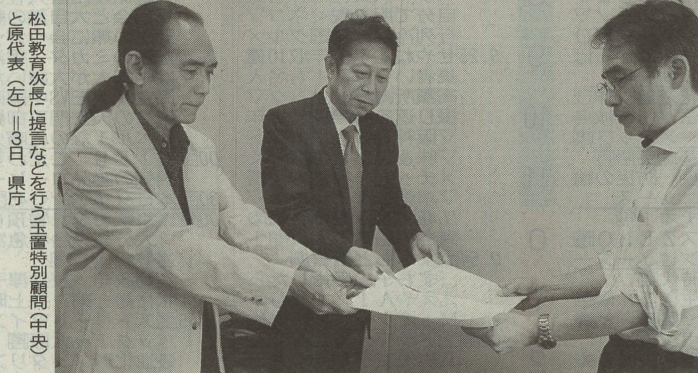
判断で世界遺産の保全を考えてほしい」と述べた。

住民団体「奥熊野玉置の世界遺産を守る会」の原秀雄代表も今後の保存管理について要望書を提出した。

県庁では、県教委の松田登志雄教育次長が対応。「十津川村と連携、協力し、今後は慎重に対応したい」と答えた。

玉置さんによると、全国的にも世界遺産保全に対する無理解

な事案がみられるという。今後、世界遺産の保全意識を高める取り組みを文化庁に働きかけることにしている。



松田教育次長に提言(左)を行う玉置特別顧問(中央)と原代表(右)。3日、県庁